

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アフリカにおける情報構造の類型論的研究」第7回研究会

日時：2013年6月8日 2時～5時半

場所：AA研304

発表者：下條光明（ニューヨーク州立バッファロー大学）

タイトル：焦点構造と文形式—日本語における談話データ分析を中心として—

第7回研究会は特別ゲストに下條さんを招いて、情報構造の研究について最新の研究成果と研究の流れを話していただきました。外部からも若手研究者の参加をえて、活発な議論ができました。発表の詳細は、添付資料をご覧ください。

焦点構造と文形式—日本語における談話データ分析を中心として—

Focus structure and sentence form: with reference to
discourse analysis in Japanese

下條 光明

Mitsuaki Shimojo

shimojo@buffalo.edu

Department of Linguistics

University at Buffalo, The State University of New York

アウトライン

- 情報構造に係わる諸概念・理論
 - 主題の定義づけ
 - 情報のステータスにまつわる諸理論
 - a. 焦点構造のタイプ (Lambrecht 1996)
 - b. 情報の活性化・顕著さ (Chafe 1994; Gundel, et al 1993)
 - c. 既知・未知と既出・未出の組み合わせ (Prince 1992)
 - d. 従属焦点 (Erteschik-Shir 1997, 2007)
- 談話データの数量的分析
 - Givón (1983)
 - Prince (1992)
 - 中心化理論 Centering Theory (Grosz, et al 1995)
- まとめ・今後の課題

- 情報構造にまつわる主要な問題
 - 文要素が談話上のどのような機能(旧情報・新情報、主題・焦点、対比など)を表しているか／表す傾向があるか。
 - それらの談話機能がどのような文形式(構文、語順、形態素など)や文アクセントと結びついているか／結びつく傾向があるか。
 - それらの談話機能が特定の文形式で区別されるかどうか。
 - 談話機能と文形式の関係は絶対的(文法的)なものか、談話傾向か。
 - 談話ジャンル間(書き言葉、話し言葉、語り、会話など)、あるいは話者間での違いがあるかどうか。
 - 上の点において言語間での共通点や違いがあるかどうか。

- 談話機能において文はおおむね2つの要素に分けられる
(先行研究の概要は Vallduví 1992: Ch.3 が詳しい)
 - topic and comment (Gundel 1974; Dahl 1974; Kuno 1980; Reinhart 1981など)
 - topic and focus (Erteschik-Shir 1997, 2007)
 - presupposition and focus (Rochemont 1986; Prince 1981; Lambrecht 1994など)
 - theme and rheme (Firbas 1966; Halliday 1967など)

topic
presupposition
theme

主張(assertion)を導く部分

comment
focus
rheme

主張 (assertion) に直接係わる部分

- トピックの異なる概念
 - 文(統語的)トピック: topic is what the sentence is about (Halliday 1967, Reinhart 1982など); 主語あるいは主題化要素で示されるとする考え方もあるが(Halliday)、aboutness による操作定義付けが困難。
 - 語用論的トピック
 - ❖ 談話文脈において情報貢献度が最も低い (Firbas 1966)、前提となる情報(Lambrecht 1994)
 - ❖ 主題性・継続性・salience (Givón 1983)
 - ❖ 談話全体の主題 (Keenan-Ochs & Schieffelin 1976)

} 談話の各文に主題があるとは限らない

- a. Does **he** want mustard on his broccoli?
- b. **I** don't think so, thanks. **Brown mustard** he likes, but **this yellow stuff** he doesn't touch.

(Vallduví 1992: 35)

文トピック＝ he, I (主語)
 brown mustard, this yellow stuff (主題化要素)

談話トピック＝ he and/or mustard
 “I don't think so” は談話トピックを含まない

- 情報のステータスにまつわる諸理論—焦点構造のタイプ (Lambrecht 1996)—

(1) 述部焦点文 (predicate-focus)

What happened to your car?

車どうしたの？

- a. My car/It broke DOWN.
- b. (La mia macchina) si è ROTTA.
- c. (Ma voiture) elle est en PANNE.
- d. (Kuruma wa) KOSYOO-sita.

(車は)故障した。

(2) 項焦点文 (argument-focus)

I heard your motorcycle broke down?

バイクが故障したって聞いたけど。

- a. My CAR broke down.
- b. Si è rotta la mia MACCHINA./E la mia MACCHINA che si è rotta.
- c. C'est ma VOITURE qui est en panne.
- d. KURUMA ga kosyoosita.

車が故障した。

- 情報のステータスにまつわる諸理論—焦点構造のタイプ (Lambrecht 1996)—

(3) 文焦点文 (sentence-focus)

What happened?

どうしたの？

- a. My CAR broke down.
- b. Mi si è rotta (ROTTA) la MACCHINA.
- c. J'ai ma VOITURE qui est en PANNE.
- d. KURUMA ga KOSYOO-sita. 車が故障した。

- 述部焦点文 (1) が談話において使用頻度が高いデフォルトの焦点構造タイプ。
- 日本語の場合、「は」と「が」の使用で**ほぼ**絶対的 (文法的) な制約がある。すなわち「は」=焦点外、「が」=焦点内。



ただしこの関係は談話上の理由で例外もある。

- 情報のステータスにまつわる諸理論—情報の活性化・顕著さ—
旧情報のハイアラーキー (The givenness hierarchy) (Gundel, et al. 1993)

I couldn't sleep last night. **A dog** kept me awake.

type identifiable: **a dog** (you know what dogs are, but it doesn't matter which one I'm talking about)

< **referential:** **this dog** (i.e. some particular dog)

< **uniquely identifiable:** **my neighbor's dog** (which you might or might not know)

< **familiar:** **that dog** (you know the one)

< **activated:** **this dog**

< **in focus:** **it**

- 情報の活性化の程度によるハイアラーキー (Chafe 1994, *Dryer 1996)

談話においてある指示対象が導入されると、その対象が聞き手の意識の中で活性化される。後方文脈で指示対象が継続すれば活性化が継続するが、指示対象が継続しなければ非活性化が起こる。

Inactive < Semi-activated < Activated < Focus of attention*
full NP ←————→ pronoun, (zero anaphora)

代名詞の使用は文脈から特定可能かつ活性化された情報の標示に限られる。

“John went to Bob’s party and parked next to a classic Ford Falcon.
He went inside and talked to Bob for more than an hour.
Bob told him that he recently got engaged.
He also said he bought *it (???) / the Falcon yesterday.”

- 情報の活性化の程度によるハイアラーキー (Chafe 1994, *Dryer 1996)

Inactive < Semi-activated < Activated < Focus of attention*

Gundel, et al (1993) や Dryer (1996) は「活性化された情報」をさらに細分化。特に活性化の焦点となっている情報を「焦点内」あるいは「注意の焦点」とする。

Activated but not focus of attention < Focus of attention

複数の活性化された情報が存在する談話では、ある談話の時点においてその中の特定の情報に聞き手の注意が注がれると仮定される。(cf. eye movement)

日本語の場合、ゼロ代名詞の使用が「注意の焦点」に関係する
(後述の中心化理論参照)。

- 情報の活性化の程度によるハイラーキー (Chafe 1994, *Dryer 1996)

Inactive < **Semi-activated** < Activated < Focus of attention*

Dryer (1996) は半活性化された情報を2つのタイプに分類

(1) 前に活性化されたが非活性化された情報

(recently activated but now semi-activated)

(2) 活性化された関連情報によって活性化に近づけられた情報

(accessible to activation)

“**John** came into the room with a **woman** we have never met. We wondered where **his wife** was.”



関連情報による推論(inference)などにより活性化に近づけられる

- 情報のステータスにまつわる諸理論—Prince (1992)—

従来の新・旧情報の対立を既知・未知(聞き手中心の分類)と既出・未出(先行談話中心の分類)に分割し4つのタイプに分類

a. hearer-old, discourse-old

談話が成立する時点で聞き手がすで知っているものと話し手が信じていて、かつ先行談話から引き出すことができる情報

b. hearer-old, discourse-new

談話が成立する時点で聞き手がすで知っているものと話し手が信じているが、先行談話から引き出すことができない情報

c. hearer-new, discourse-new

談話が成立する時点で聞き手が知らないものと話し手が信じていて、先行談話からも引き出すことができない情報

d. hearer-new, discourse-old (Prince によればこのタイプは存在しない)

談話が成立する時点で聞き手が知らないものと話し手が信じているが、先行談話からは引き出すことができる情報

- 情報のステータスにまつわる諸理論—Prince (1992)—

	Hearer-new	Hearer-old
Discourse-new	‘brand-new’ I’m calling someone . ‘hearer-inferable’ I got on a bus and the driver was drunk.	‘unused’ I’m calling President Obama .
Discourse-old	存在しない ?	‘evoked’ I’m calling President Obama now. I figure he will be up.



談話には導入されたが
聞き手が知らない(共有されていない)情報

日本語では聞き手と話し手が共有しない情報には直接指示が不可能

- a. 田中と言います/?です [自己紹介:共有情報ではないことが前提]
- b. 田中さんが来ました (田中さん=既知)
- c. 田中さんという人が来ました (田中さん=未知)

A: きのう田中君に会ってさ...

B: 田中君 って/*は/*(ゼロ助詞) 誰? (田中君=既出・未知)

- 情報のステータスにまつわる諸理論—Erteschik-Shir (1997, 2007)—

The Focus of a sentence S = the (intension of a) constituent c of S which the speaker intends to **direct the attention of his/her hearer(s) to**, by uttering S (Erteschik-Shir 1997: 11).

I.e. focus = assertion of a sentence, topic = presupposition

*Wh-question*による例

a. What did the children do?	The children ATE THE CANDY.
	TOP FOC

b. What did the children eat?	The children ate THE CANDY.
	TOP FOC

c. Who ate the candy?	THE CHILDREN ate the candy.
	FOC TOP

うそテスト lie-test (主張assertion部分の検証テスト) (Erteschik-Shir 1973)

Speaker A: John said that he knows Peter.

Speaker B: a. That's a lie, he didn't. focus = 'x said'
 b. That's a lie, he doesn't. focus = 'x knows Peter'

Speaker A: John was surprised that he knows Peter.

Speaker B: a. That's a lie, he wasn't. focus = 'x was surprised'
 b. *That's a lie, he doesn't. focus ≠ 'x knows Peter'

聞き手Bが話し手Aの発話の内容をくつがえすことができない部分 → 話し手Aが聞き手Bの注意を引く意図がなかった情報、すなわち焦点外の部分

対比要素 = 従属焦点 subordinate focus (Erteschik-Shir 1997, 2007)

対比要素とは、先行文脈で与えられた指示対象の集合から選ばれた要素であり、文全体の情報構造においてピックまたは焦点のいずれにもなり得る。

対比ピック

- a. 私は兄と妹がいます。
- b. 兄は**東京に住んでいます。

対比焦点

A1: ご兄弟は?

B1: 兄と妹がいます。

A2: それで、どなたが東京にいらっしゃるの?

B2: **兄が**東京にいます。

対比トピックと対比焦点の共通点

(1) 談話機能:どちらも情報度が高く省略不可能

(2) 統語上の特徴:諸言語で左方移動される傾向

諸言語で、文頭のトピックは対比や話題の転換に伴うトピック (switch topic) を表す。

また、文頭の焦点要素は対比的な焦点を表すことが多い (Catalan, Czech, Danish, German, Hungarian, Italian, Japanese, Korean, and American Sign Languageなど) (Erteschik-Shir 2007)。

対比トピックと対比焦点の共通性をどうとらえるか? → 従属焦点構造

従属焦点構造とは

トピックあるいは焦点となる(主文の)焦点構造の中に従属するトピックまたは焦点を持つ。この2重構造により“a person I know”のような特定・不定名詞句における対比焦点の情報構造を示すことができる。

- a. **A person I know** is famous.
- b. A person_{foc} [I_{top} know_]
- c. I_{top} know [a person]_{foc}

不定名詞‘a person’が焦点であるが、‘I’がトピックであるので「特定」の読みが導かれる。(b)の焦点構造は(c)と同じ。

対比トピック

- a. 私は兄と妹がいます。
- b. **兄は**東京に住んでいます。

焦点構造

$[\{ani_{\text{foc}}, imooto\}_{\text{top}}]-WA_{\text{top}}$

対比焦点

- A1: ご兄弟は?
- B1: 兄と妹がいます。
- A2: それで、どなたが東京にいらっしゃるの?
- B2: **兄が**東京にいます。

$[\{ani_{\text{foc}}, imooto\}_{\text{top}}]-GA_{\text{foc}}$

従属焦点構造は同じ

- 談話データの数量的分析— Givón (1983)—

トピックには連続性の高いものと低いものがある。→ トピックの連続性・非連続性の計量法。

トピックの導入や維持における使用形式などを数量的に調べる。

(1) Referential distance 指示的距離

ある指示対象物が先行談話において最後に指示された時点までの距離(通常節の数で表す)。

(2) Referential persistence 指示的持続性

ある指示対象物が後方談話において指示され続ける距離(節の数)、あるいは、ある一定の後方文脈の範囲(例えば10節分の範囲)で指示される頻度。

(1) Referential distance 指示的距離

ある指示対象物が先行談話において最後に指示された時点までの距離(通常節の数で表す)。

「フロッグストーリー」(語りの談話)の例

1 **男の子が**ペットに蛙を飼っていました

2 ある晩 [男の子が寝ている時に]

3 **蛙は**逃げ出していました

4 次の日 **男の子が**目がさめて

5 [蛙がいない]のに気づき

6 とても悲しく思いました

7 **(男の子)**家の中を全部探したけれど

8 **(蛙)**見つかりません

9 **(男の子)**庭も探したけれど

10 **(蛙)**見つかりません

Referential distance

先行指示なし(20)

2

2

1

3

2

2

(1) Referential distance 指示的距離

「フロッグストーリー」(語りの談話)の例

登場人物の名詞句形式別のreferential distance 平均

「は」 (2, 2, 4, 7, 1, 1, 1, 2, 4, 1, 2, 4, 1, 3, 4, 1, 1, 2, 2, 1, 3, 2, 3, 1, 2, 2, 1, 3, 1, 1) / 30 = **2.2**

「が」 (20, 2, 2, 20, 4, 20, 20, 20) / 8 = **13.5**

ゼロ代名詞 (1, 3, 2, 2, 2, 2, 1, 4, 1, 4, 1, 3, 2, 3, 2, 2, 1, 3, 2) / 19 = **2.2**

- 「が」で受ける登場人物はreferential distanceが大きい。→ トピックの連続性が低い。相対的に活性化が低い情報を受ける。
- 「は」とゼロ代名詞ではreferential distanceが小さい。→ トピックの連続性が高い。相対的に活性化が高い情報を受ける。
- 「は」とゼロ代名詞で差はなし。

名詞句や文ではなく、なぜ節をreferential distanceのユニットとするか？

名詞句では小さすぎる。

男の子が

ペットに

蛙を

飼っていました

文プロセッシングにおいて、述語をもとに文を統合する時点で文の名詞句情報が活性化される。「男の子」、「ペット」、「蛙」が活性化。

一方、複文では大きすぎる。

次の日 男の子が目がさめて

[蛙がない]のに気づき

とても悲しく思いました

複文を通して共通の文要素があるわけではない。「目」、「蛙」など。

(2) Referential persistence 指示的持続性

ある指示対象物が後方談話において指示され続ける距離(節の数)[RP]、あるいは、ある一定の後方文脈の範囲(例えば10節分の範囲)で指示される頻度[RPF]。

「フロッグストーリー」(語りの談話)の例

男の子が:RP, RPF 蛙を:RP, RPF

- 1 **男の子が**ペットに**蛙**を飼っていました
- 2 ある晩[**男の子が**寝ている時に]
- 3 **蛙**は逃げ出していました
- 4 次の日**男の子が**目がさめて
- 5 (**男の子**)[**蛙**がない]のに気づき
- 6 (**男の子**)とても悲しく思いました
- 7 (**男の子**)家の中を全部探したけれど
- 8 (**蛙**)見つかりません
- 9 (**男の子**)庭も探したけれど
- 10 (**蛙**)見つかりません
- 11 (**男の子**)愛犬といっしょにあちこち探したけれど

1 7 0 4



この時点での連続性は「男の子が」の方が高い。

談話全体では指示対象別、形式別に平均値を出す。

会話データの例：会話における6つの主語・目的語形式の比較 (Shimojo 2005)

考察対象の6つの形式

- | | |
|------------------------------|------------|
| a. ジョンが うちで 太郎と 映画を 見た。 | 主語、目的語 |
| b. ジョンは うちで 太郎と 映画を 見た。 | 主題化主語・目的語 |
| c. (ジョンは) うちで 太郎と 映画を 見た。 | 省略主語・目的語 |
| d. ジョン-Ø うちで 太郎と 映画を 見た。 | ゼロ助詞主語・目的語 |
| e. うちで 太郎と 映画を見た、ジョン{は・が・-Ø} | 後置主語・目的語 |

2人の話者によるインフォーマルな会話、各組30分、合計8組、約240分
分析用書き起こしデータは7,909節からなる。

Table 4.24: The six encoding types in terms of RD (Shimojo 2005)

RD	ゼロ代名詞		後置要素 (ゼロ代、は、が)		「は」		ゼロ助詞		「を」		「が」	
1	1736	53%	45	41%	92	29%	204	24%	13	11%	47	11%
2	558	17%	20	18%	34	11%	68	8%	10	9%	18	4%
3	252	8%	10	9%	22	7%	35	4%	7	6%	14	3%
4	150	5%	2	2%	6	2%	23	3%	3	3%	11	3%
5	91	3%	1	1%	10	3%	17	2%	2	2%	7	2%
6	59	2%	1	1%	4	1%	7	1%	0		2	.5%
7	56	2%	2	2%	3	1%	10	1%	3	3%	5	1%
8	33	1%	2	2%	5	2%	4	.5%	0		3	1%
9	28	1%	1	1%	2	1%	7	1%	2	2%	1	.2%
10	22	1%	1	1%	5	2%	9	1%	1	1%	2	.5%
11	18	1%	0		4	1%	2	.2%	0		1	.2%
12	17	1%	1	1%	2	1%	6	1%	0		1	.2%
13	14	.4%	1	1%	1	.3%	6	1%	0		1	.2%
14	9	.3%	1	1%	2	1%	2	.2%	0		2	.5%
15	12	.4%	0		4	1%	1	.1%	0		1	.2%
16	14	.4%	0		3	1%	0		1	1%	1	.2%
17	7	.2%	1	1%	0		2	.2%	1	1%	0	
18	7	.2%	0		0		1	.1%	0		1	.2%
19	8	.2%	0		1	.3%	2	.2%	2	2%	0	
20	102	3%	2	2%	28	9%	77	9%	8	7%	27	6%
NPM	76	2%	19	17%	87	28%	369	43%	62	54%	281	66%
Total	3269	100%	110	100%	315	100%	852	100%	115	100%	426	100%
Mean RD	3.5		6.2		9.8		12.3		14.4		16.1	

Table 4.25: The six encoding types in terms of RD 1-10 and 11-NPM (Shimojo 1995)

RD	ゼロ代名詞		後置要素 (ゼロ代、は、が)		「は」		ゼロ助詞		「を」		「が」	
1-10	2985	91%	85	77%	183	58%	384	45%	41	36%	110	26%
11-NPM	284	9%	25	23%	132	42%	468	55%	74	64%	316	74%
Total	3269	100%	110	100%	315	100%	852	100%	115	100%	426	100%

RD < 10



RD > 10

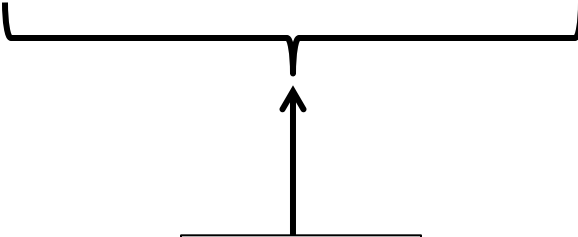
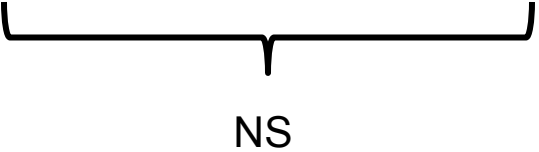
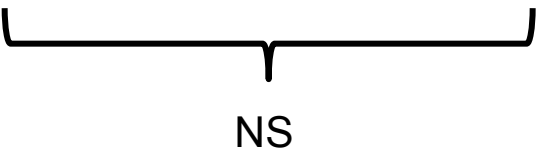


Table 5.5: The six encoding types in terms of RP-f (Shimojo 2005)

RP-f	ゼロ代名詞		「を」		「は」		「が」		後置		ゼロ助詞	
0	550	17%	24	21%	77	24%	113	27%	33	30%	294	35%
1	492	15%	29	25%	45	14%	79	19%	23	21%	172	20%
2	464	14%	11	10%	53	17%	74	17%	28	25%	118	14%
3	435	13%	11	10%	36	11%	47	11%	5	5%	92	11%
4	328	10%	11	10%	20	6%	37	9%	9	8%	70	8%
5	316	10%	6	5%	38	12%	25	6%	2	2%	44	5%
6	236	7%	12	10%	15	5%	24	6%	6	5%	27	3%
7	206	6%	3	3%	19	6%	12	3%	3	3%	21	2%
8	132	4%	2	2%	4	1%	9	2%	1	1%	6	1%
9	76	2%	5	4%	3	1%	5	1%	0		7	1%
10	34	1%	1	1%	5	2%	1	.2%	0		1	.1%
Total	3269	100%	115	100%	315	100%	426	100%	110	100%	852	100%
Mean RP-f	3.2		2.8		2.7		2.3		1.9		1.9	



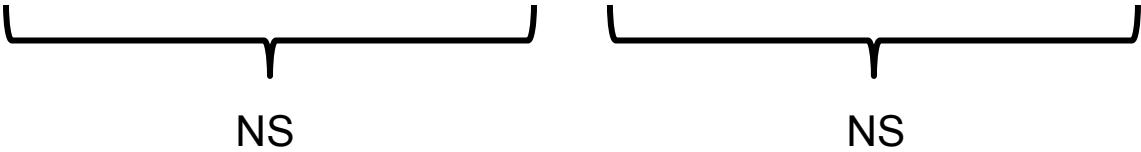
NS



NS

Table 5.12: The six encoding types in terms of RP (Shimojo 2005)

RP	「を」		「は」		ゼロ代名詞		「が」		ゼロ助詞		後置	
0	36	35%	81	32%	629	40%	135	36%	361	50%	46	59%
1	16	15%	42	16%	261	17%	91	24%	177	25%	20	26%
2	11	11%	26	10%	189	12%	47	12%	75	10%	7	9%
3	10	10%	31	12%	144	9%	33	9%	45	6%	1	1%
4	4	4%	22	9%	94	6%	20	5%	23	3%	2	3%
5	3	3%	12	5%	64	4%	9	2%	12	2%	1	1%
6	4	4%	10	4%	44	3%	17	4%	13	2%	1	1%
7	0		10	4%	29	2%	7	2%	4	1%	0	
8	4	4%	6	2%	32	2%	7	2%	3	.4%	0	
9	3	3%	3	1%	23	1%	4	1%	1	.1%	0	
10	13	13%	14	5%	62	4%	10	3%	3	.4%	0	
Total	104	100%	257	100%	1571	100%	380	100%	717	100%	78	100%
Mean RP	3.0		2.6		2.1		2.0		1.1		0.7	



後方文脈での連続性

連続 {「を」, 「は」} > {ゼロ代名詞, 「が」} > ゼロ助詞 > 後置 非連続

「は」とゼロ助詞の使用はトピックの連続性との関連が薄い

対比関係における「は」とゼロ助詞の比較

	対比的使用		その他	合計
	並列的対比	対比的反応		
「は」	176 (.52)	101 (.30)	59 (.18)	336 (1.00)
ゼロ助詞	41 (.04)	44 (.05)	844 (.91)	929 (1.00)

並列的対比の例(同一話者が並列する命題を対比的に提示)

B608 違う違う、**あいつは**博士課程

B609 **マルコが**修士課程

対比的反応の例(先行発話への対比的反応)

A52 うち-Ø まだ一個も書いてない エッセー-Ø

B53 **うちは** もうなんか 一回 タイプして

B54 (S) (O) 出して

- 会話における6つの主語・目的語形式の比較 (Shimojo 2005)

機能的区分	語用論的機能
ゼロ代名詞 「が」・「を」	先行文脈で活性化された情報、かつ後方文脈での連続性(活性化) 先行文脈で活性化されていない情報、かつ後方文脈での連続性(活性化)
「は」	対比関係の表示・後方文脈での連続性(活性化)
ゼロ助詞	非対比関係の表示・後方文脈での非連続性(非活性化)
後置要素 (主語・目的語)	後方文脈における非連続性(非活性化)

- 会話における6つの主語・目的語形式の比較 (Shimojo 2005)

情報の重要性(後方文脈における連続性の有無)

機能的区分	語用論的機能
ゼロ代名詞 「が」・「を」	後方文脈での連続性・重要な情報
「は」	
ゼロ助詞	後方文脈での非連続性・重要でない情報
後置要素 (主語・目的語)	

- 談話データの数量的分析—既知・未知と既出・未出 (Prince 1992)—

日本語と韓国語における主題化の比較分析 (Lee & Shimojo 2013)

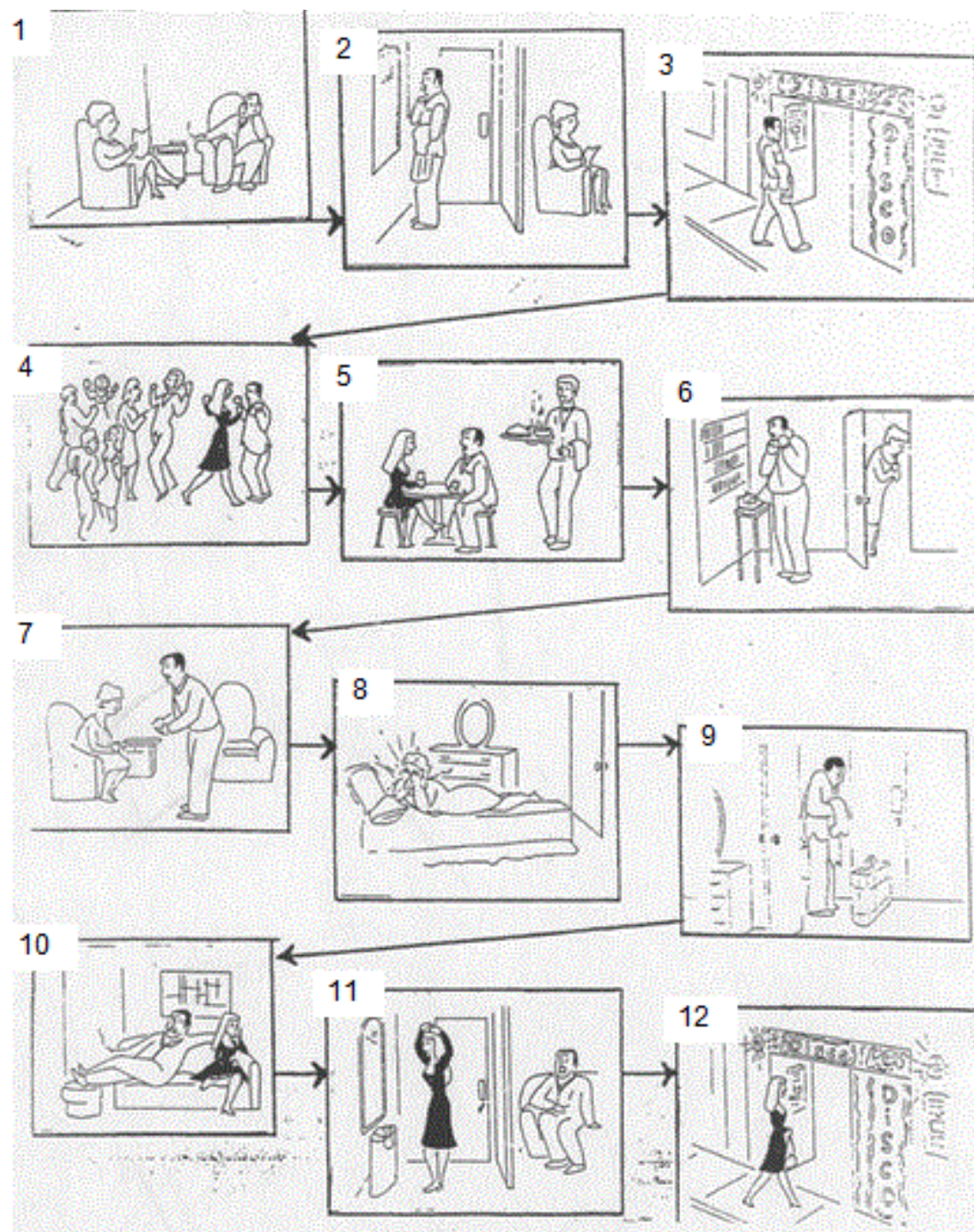
データ

- (1) 日本語訳聖書(1989)・韓国語訳聖書(1991):マルコによる福音書1～3章、同一節で名詞句の形式を比較(合計93の名詞句での比較)
- (2) 12コマの絵に基づいて日本語・韓国語母語話者が書いた物語作文:各言語10名の母語話者、計20名分

作文作成に使った絵

Brown & Yule (1983)に基づく

- 各コマにつき最低1文を使い、全体として1つのストーリーとするように指示。
- 絵の使用：自由作文ではあるが、内容をある程度コントロールすることで二言語間の比較をやすくする。



(1) 聖書データ

Table 1: 主節(主題化)主語の形式(マルコによる福音書1～3章、計93)
同一節間での比較

	「は」(主題)	「が」(主格)
「ウン／ヌン」(主題)	49 (topic-topic match)	1 (mismatch)
「カ／イ」(主格)	25 (mismatch)	18 (nom.-nom. match)

日本語と韓国語の
ずれ

Table 8: Prince (1992) による内訳—日本語 (Total: 93)

	「が」(主格)	「は」(主題)	Total
未知・未出	15 (.94)	1 (.06)	16 (1.00)
既知・未出	0	12 (1.00)	12 (1.00)
既知・既出	4 (.06)	61 (.94)	65 (1.00)

Table 9: Prince (1992) による内訳—韓国語 (Total: 93)

	「カ／イ」(主格)	「ウン／ヌン」(主題)	Total
未知・未出	14 (.88)	2 (.13)	16 (1.00)
既知・未出	9 (.82)	2 (.18)	11 (1.00)
既知・既出	21 (.32)	45 (.68)	66 (1.00)

- 既知の情報→「は」、未知の情報→「が」
- 未出の情報→「カ／イ」、既出の情報→主格、主題のいずれも使用

Table 10: 韓国語 既知・既出の情報と談話内エピソード

	既知・既出 「カ／イ」(主格)	既知・既出 「ウン／ヌン」(主題)
新しいエピソード内での導入	19	5
同一エピソード内で継続指示対象	2	40

- 談話エピソードとは “a group of Events and States in sequence that are bound together by a unifying theme” (Smith 2003:8), or “a coherent sequence of sentences of a discourse, linguistically marked for beginning and/or end, and further defined in terms of some kind of ‘thematic unity’— for instance, in terms of identical participants, time, location or global event or action” (van Dijk 1981:177).
- 韓国語では、先行談話において主題でマークされた指示対象でも新しいエピソードで再導入する場合に主格マーカーが使用される。「カ／イ」→ 未出のマーカー(エピソード内での「未出」も含めて)
- 日本語では談話エピソード構造に関係なく、既知の指示対象は「は」でマークされる。

新エピソードの例

(5) マルコによる福音書 2:23-24 (韓国語訳)

Enu ansikil-ey yeyswunim-i milpath sailo cinakasil ttay ceycatul-**i**
hamkkey

one Sabbath-on Jesus-NOM field in pass by when disciples-
NOM together

ka-myense milisak-ul calla mekessta.

‘One Sabbath day, when Jesus was passing through the grainfields, his disciples (NOM) walked with him, picking up and eating some heads of grain.’

(6) マルコによる福音書 2:23-24 (日本語訳)

ある安息日にイエスは麦畑を行かれると、弟子たち**は**歩きながら麦の穂を摘み始めた。

(2) 物語作文データ

Table 2: 主語形式の頻度

	日本語		韓国語	
主題	120	(.69)	86	(.53)
主格	19	(.11)	63	(.39)
ゼロ代名詞	35	(.20)	13	(.08)
ゼロ助詞	1	(.01)	1	(.01)
計	175	(1.00)	163	(1.00)

- 日本語と比較して韓国語では主格マーカーの使用が多い。

(2) 物語作文データ

Table 4: 主要登場人物導入後の主語形式 (pictures 2-12)

	主題	主格
韓国語	50	46
日本語	76	3

- 韓国語では、導入後も同じ指示対象に主格マーカーを頻繁に使用している。

(2) 物語作文データ

Table 5: 話者別による主語形式の使用(各絵の第1文のみ)ー日本語

話者	A		B		C		D		E		F		G		H		I		J		Total	
主格	3	(.17)	2	(.15)	3	(.14)	3	(.13)	2	(.13)	3	(.12)	1	(.08)	1	(.08)	1	(.06)	0		19	(.11)
主題	12	(.67)	8	(.62)	17	(.77)	11	(.48)	11	(.73)	21	(.81)	9	(.69)	6	(.50)	11	(.69)	14	(.82)	120	(.69)
ゼロ代	3	(.17)	3	(.23)	2	(.09)	9	(.39)	2	(.13)	2	(.08)	3	(.23)	5	(.42)	3	(.19)	3	(.18)	35	(.20)
ゼロ助																	1	(.06)			1	(.01)
Total	18	(1.00)	13	(1.00)	22	(1.00)	23	(1.00)	15	(1.00)	26	(1.00)	13	(1.00)	12	(1.00)	16	(1.00)	17	(1.00)	175	(1.00)

- 日本語では、ほとんど個人差はなく、「は」の使用が多い。

(2) 物語作文データ

Table 6: 話者別による主語形式の使用(各絵の第1文のみ)―韓国語

話者	A		B		C		D		E		F		G		H		I		J		Total	
主格	12	(.86)	12	(.80)	7	(.41)	7	(.41)	6	(.40)	6	(.33)	5	(.29)	3	(.19)	2	(.17)	3	(.14)	63	(.39)
主題	2	(.14)	2	(.13)	10	(.59)	10	(.59)	6	(.40)	12	(.67)	12	(.71)	9	(.56)	6	(.50)	17	(.77)	86	(.53)
ゼロ代			1	(.07)					2	(.13)					4	(.25)	4	(.33)	2	(.09)	13	(.08)
ゼロ助									1	(.07)											1	(.01)
Total	14	(1.00)	15	(1.00)	17	(1.00)	17	(1.00)	15	(1.00)	18	(1.00)	17	(1.00)	16	(1.00)	12	(1.00)	22	(1.00)	163	(1.00)

- 韓国語では、主格使用の多い話者から主題使用の多い話者まで個人差が目立つ。
- なぜ個人差? → 談話エピソードの区切りが話者によって異なる。

- 談話データの数量的分析—中心化理論 Centering Theory (Grosz, et al 1995)—

談話における注意の中心 (center of attention) の移り変わり (transition) と結束性 (coherence) の相互関係を表す理論。

日本語への応用 (ゼロ代名詞の照応関係などが研究対象になってきた)
Kameyama (1985)、Iida (1998)、Yamura-Takei (2005)、Yamura-Takei & Fujiwara (2007) など

- 談話中の発話 U には、**前向きセンター** $Cf(U)$ 、すなわち U に含まれる名詞句のリスト(次の発話のセンターの候補)、および**後ろ向きセンター** $Cb(U)$ 、すなわち Cf の中で現在の発話のセンターになっている要素(各発話で1つだけ存在)、がある。
- Cf をランキングの高い順に並べたときの最高位の要素を**優先センター** $CP(U)$ とする。

Cf ランキング (ランキングが高いほど発話の焦点になりやすい)
 主題(は) > 主語(が) > 間接目的語(に) > 直接目的語(を) > その他
 (Walker, Iida & Cote 2004)

- 現発話の後ろ向きセンター $Cb(U_i)$ は 1つ前の発話の前向きセンター $Cf(U_{i-1})$ のうち、 Cf ランキングで最高位の序列のもの
 (ただし $Cf(U_i)$ が U_{i-1} に存在しない場合、 $Cb(U_i)$ はない、(例) 談話の冒頭など)

- Cbの遷移には次の5つのタイプがある。

	Cb(Ui)=Cb(Ui-1) 同じ後ろ向きセンター	Cb(Ui) ≠ Cb(Ui-1) 新しい後ろ向きセンター
Cb(Ui) = CP(Ui) 後ろ向きセンターが優先センター Ui+1でセンターが続くと予想される	CONTINUE	SMOOTH-SHIFT
Cb(Ui) ≠ CP(Ui) 後ろ向きセンターが優先センターでない Ui+1でセンターが移ると予想される	RETAIN	ROUGH-SHIFT
Cf が Ui-1 に存在しない NULL		

- 優先順序は continue > retain > smooth-shift > rough-shift > null
 結束性が高い 

注意の中心（話題の焦点、またはセンター）の遷移

話題の焦点 (CENTER) の推移

あの家にトムが住んでいます。

NULL

先行発話との共通要素がない中心

トムは意地悪なネコです。

CONTINUE (CON) 継続

先行発話からの継続中心

だから、ジェリーはトムをさけています。

RETAIN (RET) 維持

新しい焦点候補と共起する
先行発話からの中心

それに、ジェリーはなかなかつかまりません。

SHIFT (SHIFT) 移行

新しい中心

ジェリーは賢いネズミです。

CONTINUE (CON) 継続

ある日、スパイクが昼寝していました。

NULL

上の例は竹井 (2011) による

1. あの家にトムが [NULL] すんでいます

2. トムは [CON] 意地悪な猫です

3. だから、ジェリーはトムを [RET] 避けています

4. でも、トムはいつもジェリーを [SHIFT] 追いかけます

5. ジェリーは [CON] 賢いねずみです

Cb {CP, Cf1, Cf2...}

{トム、家}

トム {トム、意地悪な猫}

トム {ジェリー、トム}

ジェリー {トム、ジェリー}

ジェリー {ジェリー}



後ろ向きセンター

前向きセンター

- 中心化理論の手法の利点

- 主語(あるいは主題化主語)だけを扱ったこれまでの数量的分析のスコープを広げる。

すべての主語が同じ性質の話題焦点を表すわけではないので、主語だけ进行分析しても焦点の性質と使用形式の関係がわかりにくい。

- 各文における注意の中心、および文から文への注意の中心の移り変わりを調べることで情報構造を局所的に見ることができる。

Givón (1983) の手法 → 特定の指示対象が談話中のどの文にあるかを調べその連続性を見る。大局的。

中心化理論 → 談話中の各文に含まれる注意の中心(談話の焦点)がどのように移り変わるかを見る。局所的。

- 中心化理論を使った分析例

日本語物語作文におけるゼロ代名詞と「は」(Shimojo, to appear)

データ

- (1) 12コマの絵に基づいて日本語母語話者11名が書いた物語作文(前述データ参照)
- (2) 5分間のクレイアニメ「ピングー」(ピングーの家出)を見て母語話者62名が書いた物語作文

- 中心化理論を使った分析例

Table 2: Cbの形式・遷移タイプ別

遷移タイプ	ゼロ代名詞	「は」	「が」や「を」など	計
NULL	20 (.13)	98 (.63)	38(.24)	156 (1.00)
CON	478 (.62)	273 (.36)	14 (.02)	765 (1.00)
RET	70 (.17)	262 (.62)	90 (.21)	422 (1.00)
SHIFT	258 (.50)	224 (.43)	37 (.07)	519 (1.00)
計	826 (.44)	857 (.46)	179 (.10)	1862 (1.00)

- Cb(注意の中心)の形式はゼロ代名詞と「は」が圧倒的に多い。
- 3つの遷移タイプ別の比較

CONTINUE	ゼロ代名詞 > 「は」
RETAIN	「は」 > ゼロ代名詞
SHIFT	ゼロ代名詞, 「は」

同一センターの継続(同一文内の2節目か、新しい文の1節目か)

- (12)
- a. 妻は [SHIFT] 部屋に閉じこもって
 - b. $\emptyset$ [CON] 泣いている。
 - c. 夫は [NULL] 荷物をまとめて
 - d. $\emptyset$ [CON] 出て行くことになった。
 - e. 夫は [CON] ディスコで知り合った女性と結婚した。

Table 4: Inter/intra-sentential persisting subject center in CONTINUE

	同一文の先行節と同じ主語	先行文と同じ主語
ゼロ代名詞	362 (.93)	105 (.42)
「は」	26 (.07)	148 (.58)
Total	388 (1.00)	253 (1.00)

$X^2(1) = 205.145, p < .001$

Table 5: Inter/intra-sentential persisting subject center in SHIFT

	同一文の先行節と同じ主語	先行文と同じ主語
ゼロ代名詞	285 (.96)	43 (.46)
「は」	12 (.04)	50 (.54)
Total	297 (1.00)	93 (1.00)

$X^2(1) = 127.272, p < .001$

- CONTINUE と SHIFT のいずれの場合も、同一文の先行節と同じ主語はゼロ代名詞で受けることが多い。これは第1節の主語を「は」で受ける場合、「は」のスコープは文全体にかかるので、第2節で主語を繰り返すことは不自然。
- CONTINUE と SHIFT のいずれの場合も、第1節の主語はゼロ代名詞と「は」の使用が多いが、「は」の場合は文が新しい談話エピソードを表す場合が多い(例: 新しいイベント、人物、時間、場所、など) (T. van Dijk 1981)。

- (12)
- a. 妻は [SHIFT] 部屋に閉じこもって
 - b. ∅ [CON] 泣いている。
 - c. 夫は [NULL] 荷物をまとめて
 - d. ∅ [CON] 出て行くことになった。
 - episodic boundary ----
 - e. 夫は [CON] ディスコで知り合った女性と結婚した。

センターの交替(同一文内の2節目、あるいは新しい文の1節目)

- (13)
- a. ペングーの両親は[RET] 楽しく食事をしていましたが
 - b. ペングーは [CON] だんだんと機嫌がわるくなってしまいました
[8節省略]
 - c. するとペングーの母親は [NULL] 彼をどなりつけました。
 - d. ペングーは [CON] 家を飛び出してしまいました。

Table 6: New subject center in CONTINUE

	同一文の先行節と異なる主語	先行文と異なる主語
ゼロ代名詞	5 (.15)	5 (.06)
「は」	28 (.85)	72 (.94)
Total	33 (1.00)	77 (1.00)

Table 7: New subject center in RETAIN

	同一文の先行節と異なる主語	先行文と異なる主語
ゼロ代名詞	16 (.25)	19 (.10)
「は」	49 (.75)	175 (.90)
Total	65 (1.00)	194 (1.00)

$X^2(1) = 7.927, p < .01$

Table 6: New subject center in SHIFT

	同一文の先行節と異なる主語	先行文と異なる主語
ゼロ代名詞	33 (.43)	36 (.21)
「は」	44 (.57)	135 (.79)
Total	77 (1.00)	171 (1.00)

$X^2(1) = 11.507, p < .001$

- いずれの遷移タイプでも、同一文内でのセンターの交替よりも、新しい文の1節目での交替の方が頻度が高い。すなわちセンターの交替は文をまたいで行う場合が多い。
- センターの交替における新しいセンターには「は」の使用が多い。これは、新しい談話エピソードへの移行が文をまたいで行われることにも関係する(ただし、談話エピソードの移行は必ずしもセンターの交替を伴わない)。

中心化理論を使った分析例のまとめ

- 先行研究では継続 (CONTINUE) の遷移タイプがゼロ代名詞の使用に係わるとされてきたが、継続そのものがゼロ代名詞の使用と結びついているわけではない。
- ゼロ代名詞の使用頻度が高いのは同一文内でセンターが継続する場合であり、センターの交替や談話エピソードの移行がある場合は、たとえ「継続」の遷移タイプであっても「は」が使われることが多い。
- すなわち、「は」=新しいセンターのマーカ、あるいは新しい談話エピソードのマーカとしての有標 (marked) 形式、ゼロ代名詞はそれ以外で使用する無標 (unmarked/default) 形式。

まとめ

- 情報構造に係わる文形式には、文の文法性に係わるもの(文法性の判断からわかるもの)から、談話上の使用傾向に係わるもの(体系的な談話データの分析が必要なもの)まで幅が広い。
- (特定の情報構造理論の是非を問うのではなく)言語の記述を目的とするならば、特定の理論をデータにあてはめるのではなく、そのデータの記述に適した理論、定義づけ、分析方法を使用する必要がある。
- 同一言語でも談話のジャンルによって異なる文法(情報構造と文形式の関係)が存在する可能性があり、特定ジャンルでの観察結果がそのまま一般化できるとは限らない。
- 言語間で比較する場合、談話ジャンルの統一だけでなく談話内容のある程度のコントロールが必要。

今後の課題

- 異なるデータ分析法による観察がどう関係付けられるか。

参考文献

- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dahl, Östen. 1974. Topic-comment structure revisited. In *Topic and Comment, Contextual Boundedness and Focus*, ed. Östen Dahl. 1-24. Hamburg: Helmut Buske.
- Dryer, Matthew S. 1996. Focus, pragmatic presupposition, and activated propositions. *Journal of Pragmatics* 26: 475-523.
- Erteschik-Shir, Nomi. 1997. *The Dynamics of Focus Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Erteschik-Shir, Nomi. 2007. *Information Structure: The Syntax-Discourse Interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Firbas, Jan. 1966. On defining the theme in functional sentence analysis. In *Travaux Linguistiques de Prague*, ed. Frantisek Daneš. 267-280. University of Alabama Press.
- Givón, Talmy. 1983. Topic Continuity in Discourse: An Introduction. In *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-language Study*, T. Givón (ed.), Amsterdam/New York: John Benjamins, 4-41.
- Grosz, Barbara; Aravind K. Joshi; Scott Weinstein. 1995. Centering: A Framework for Modeling the Local Coherence of Discourse. *Computational Linguistics* 21(2), 203-225.
- Gundel, Jeanette. 1974. *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*. Doctoral dissertation, University of Texas at Austin.
- Gundel, Jeanette, Nancy Headberg, and Ron Zacharski. 1993. Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language* 69, 274-307.

- Halliday, Michael A. K. 1967. Notes on transitivity and theme in English. *Journal of Linguistics* 3: 199-244.
- Iida, Masayo. 1998. Discourse Coherence and Shifting Centers in Japanese Texts. In *Centering Theory in Discourse*, edited by Marilyn A. Walker, Aravind K. Joshi, and Ellen F. Prince, 161-180. Oxford: Clarendon Press.
- Kameyama, Megumi. 1985. Zero anaphora: The case of Japanese. Doctoral dissertation, Stanford University.
- Keenan-Ochs, E. and B. Scheffelin. 1976. Foregrounding referents: a reconsideration of left-dislocation in discourse. *BLS* 2, 240-257.
- Kuno, Susumu. 1980. The scope of the question and negation in some verb-final languages. In *Papers from the 16th Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society*, 155-169.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information structure and sentence form: A theory of topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, EunHee; Mitsuaki Shimojo. 2013. *Mismatch of Topic between Japanese and Korean*. ms. University at Buffalo, The State University of New York.
- Prince, Ellen F. 1981. Toward a taxonomy of given-new information. In P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*, 223-255. New York: Academic Press.
- Prince, Ellen F. 1992. The ZPG letter: Subjects, definiteness, and information status. In W. Mann and S. Thompson (eds.), *Discourse description: Diverse linguistic analyses of a fund-raising text*, 295-325. Amsterdam: Benjamins.

- Reinhart, Tanya. 1981. Pragmatics and linguistics: and analysis of sentence topics. *Philosophica* 27, 53-94.
- Rochemont, Michael. 1986. *Focus in Generative Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Shimojo, Mitsuaki. 2005. *Argument Encoding in Japanese Conversation*. Hampshire and New York: Palgrave Macmillan.
- Shimojo, Mitsuaki. To appear. Saliency in discourse and sentence form: zero anaphora and topicalization in Japanese. In M. M. Jocelyne Fernandez-Vest and Robert Van Valin Jr. (eds.), *Information Structure and Spoken Language in a Cross-Linguistic Perspective*.
- Vallduví, Enric. 1992. *The Informational Component*. New York: Garland Publishing.
- Walker, Marilyn A., Masayo Iida, and Sharon Cote. (1994) Japanese discourse and the process of centering. *Computational Linguistics*, 20(2), 193-231.
- Yamura-Takei, Mitsuko., & Fujiwara, Miho. 2007. Japanese native speakers' intuition of zero use: An account by Centering theory. In M. Minami (Ed.), *Applying theory and research to learning Japanese as a foreign language* (pp. 213-245). Newcastle: Cambridge Scholars.
- 竹井光子 2011 「物語作文の導入部分におけるゼロ代名詞の使用：日本語母語話者と日本語学習者との比較」 Association of Teachers of Japanese 2011 Annual Conference. University of Hawai'i at Manoa.